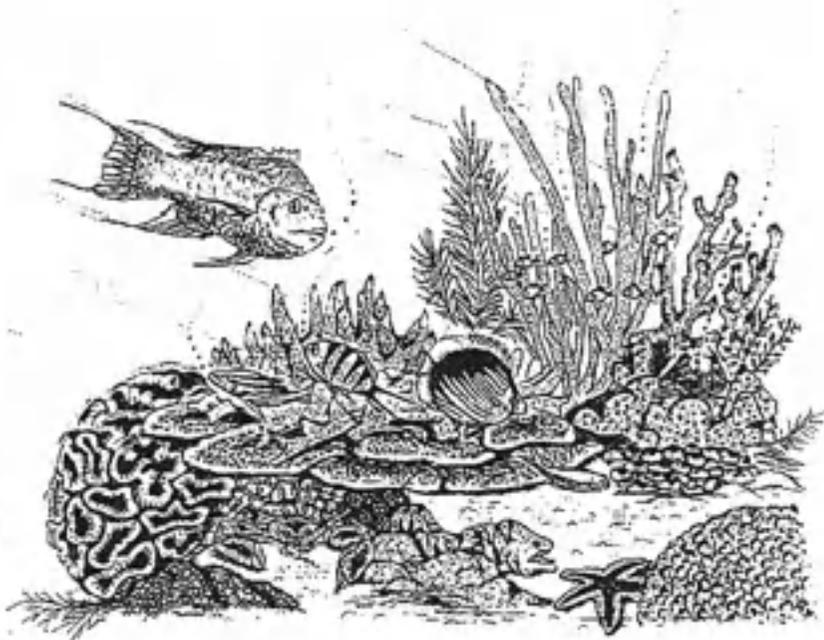


日本サンゴ礁学会の歩み —会員動向からみる—

日本サンゴ礁学会(仮称)
ニュースレター

設立準備号



1997年5月

茅根 創(事務局長/東京大・理)

日本サンゴ礁学会ニュースレター
1998 Vol. 1
Jan.

Newsletter of Japanese Coral Reef Society

特集
[日本サンゴ礁学会設立総会報告]

新連載
1. 若手会員の聲
2. サンゴ礁関連施設探訪…阿蘇島臨海研究所…

Newsletter of
Japanese Coral Reef Society

サンゴ礁研究の歴史

- 1930-40年代 日本が最先端の研究

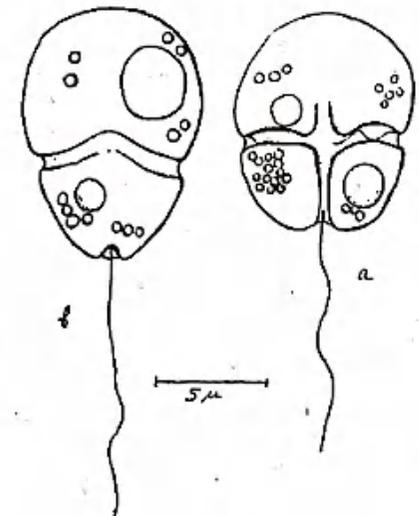
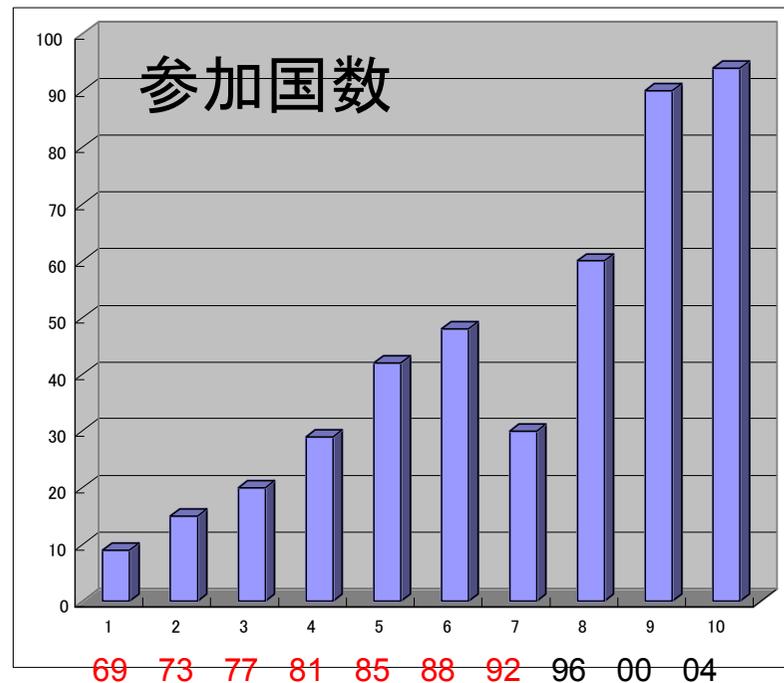
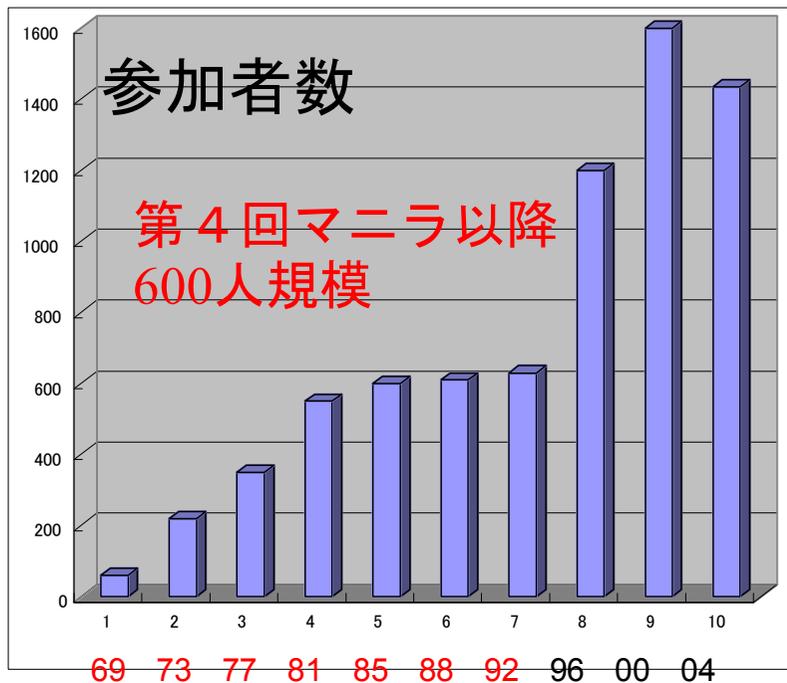


Fig. 1. Two figures of *Gymnodinium* sp. from zooxanthellae of the reef corals. a. view of the sulcus side. b. the opposite side. The outline of the general shape varies with the degree of activity of the animal.

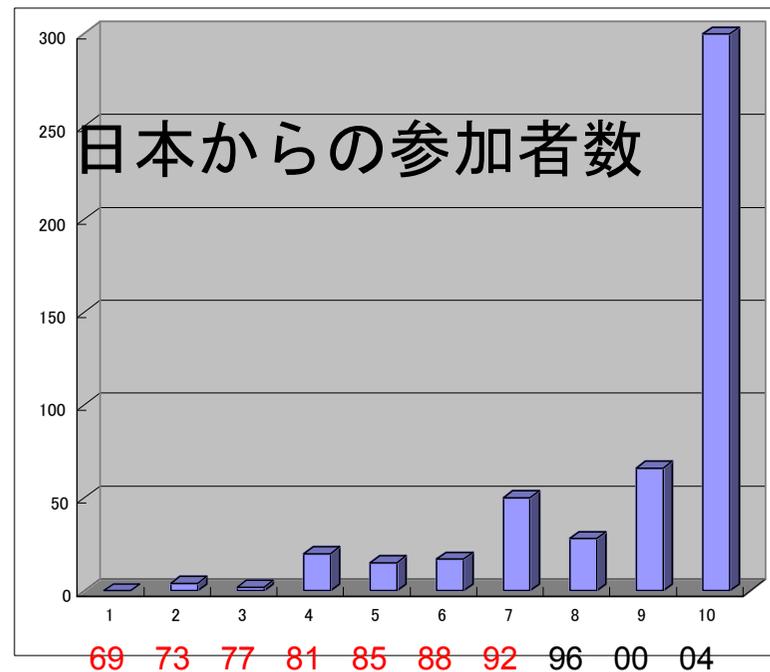
サンゴ礁研究の歴史

- 1930-40年代 日本が最先端の研究
- 1950-1980年代 米豪仏英が研究をリード
 - 1969年～ 国際サンゴ礁シンポジウム
 - 1980年 ISRS(国際サンゴ礁学会)設立
 - 1982年 Coral Reefs 創刊



国際サンゴ礁シンポジウム

- 第1回 1969年 マンダパムキャンプ(インド)
- 第2回 1973年 グレートバリアリーフ(豪)
- 第3回 1977年 マイアミ(米国)
- 第4回 1981年 マニラ(フィリピン)
- 第5回 1985年 タヒチ(仏領ポリネシア)
- 第6回 1988年 タウンズビル(豪)
- 第7回 1992年 グアム(米国)
- 第8回 1996年 パナマ(パナマ)
- 第9回 2000年 バリ(インドネシア)
- 第10回 2004年 沖縄(日本)
- 第11回 2008年 フロリダ(米国)



サンゴ礁研究の歴史

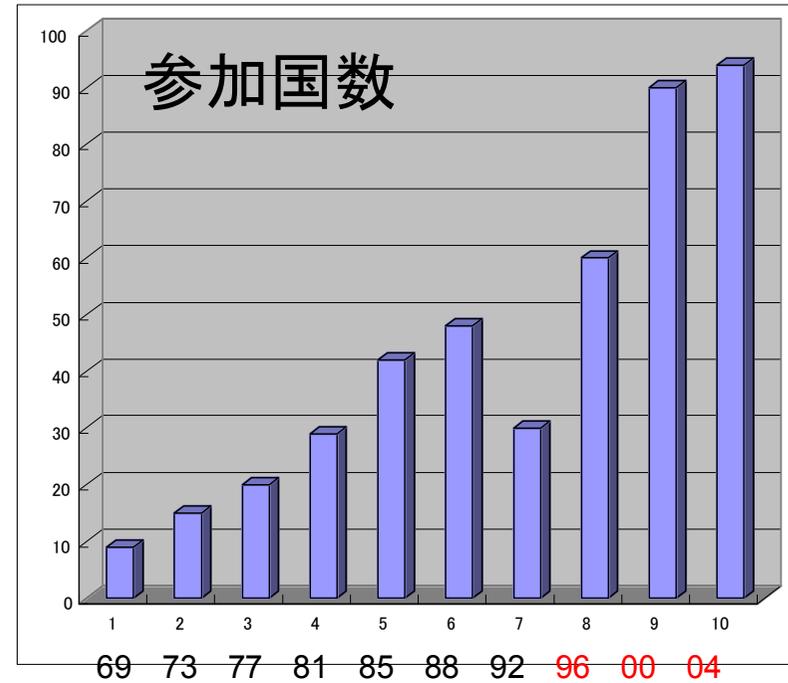
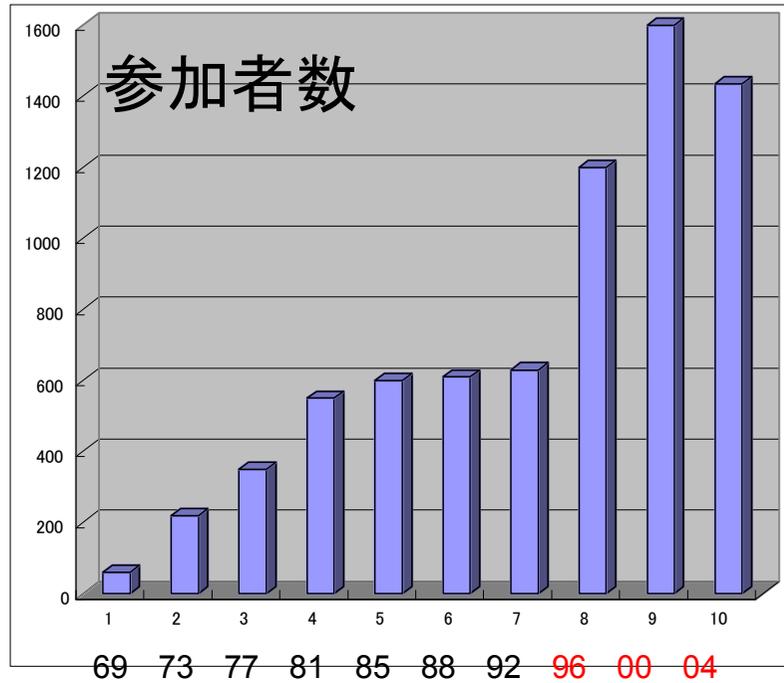
- 1930-40年代 日本が最先端の研究
- 1950-1980年代 米豪仏英が研究をリード
日本では、いくつかの大学で研究が継続.
- 1980年代後半～ サンゴ礁研究が広がる.
JAMSTEC(1988-), 工業技術院(1989-)
阿嘉島臨海研究所(1989-), 海洋バイオ研,
西海区水産研究所(1994-)

サンゴ礁研究の歴史

- 1930-40年代 日本が最先端の研究
- 1950-1980年代 米豪仏英が研究をリード
- 1980年代後半～ サンゴ礁研究が広がる.
- 1990年代後半～ サンゴ礁の保全が国際的なテーマに.

1994年 ICRI(ローカルな環境ストレス)

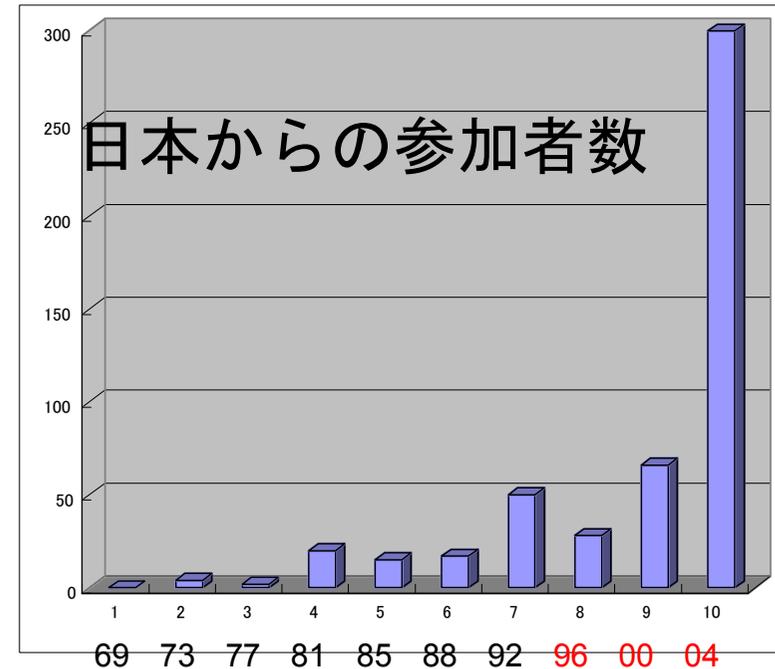
1998年白化(グローバルな環境ストレス)



* 第10回の参加者は正規登録出席者のみ.
公開シンポジウムへの一般参加が+600名.

国際サンゴ礁シンポジウム

第8回パナマ（1996年）以降
1000人をこえる規模に.
←ICRI (1994年)



日本サンゴ礁学会設立

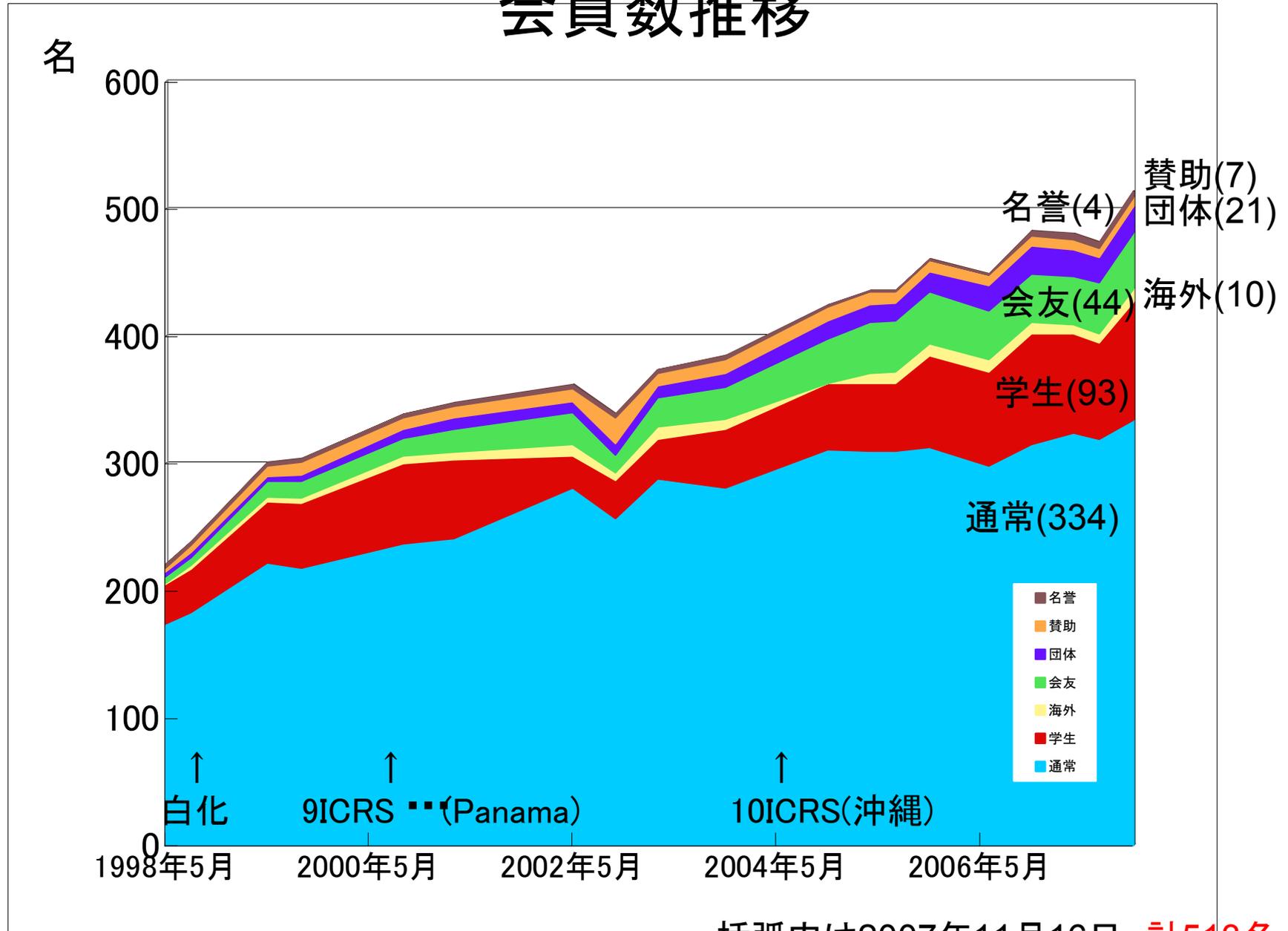
- 1930-40年代 日本が最先端の研究
- 1950-1980年代 米豪仏英が研究をリード
- 1980年代後半～ サンゴ礁研究が広がる.
- 1990年代後半～ サンゴ礁保全国際的テーマに.
- **1997年 日本サンゴ礁学会設立**

1998年 白化

2000年 環境省国際サンゴ礁研究・モニタリングセンター

2001年 パラオ国際サンゴ礁センター

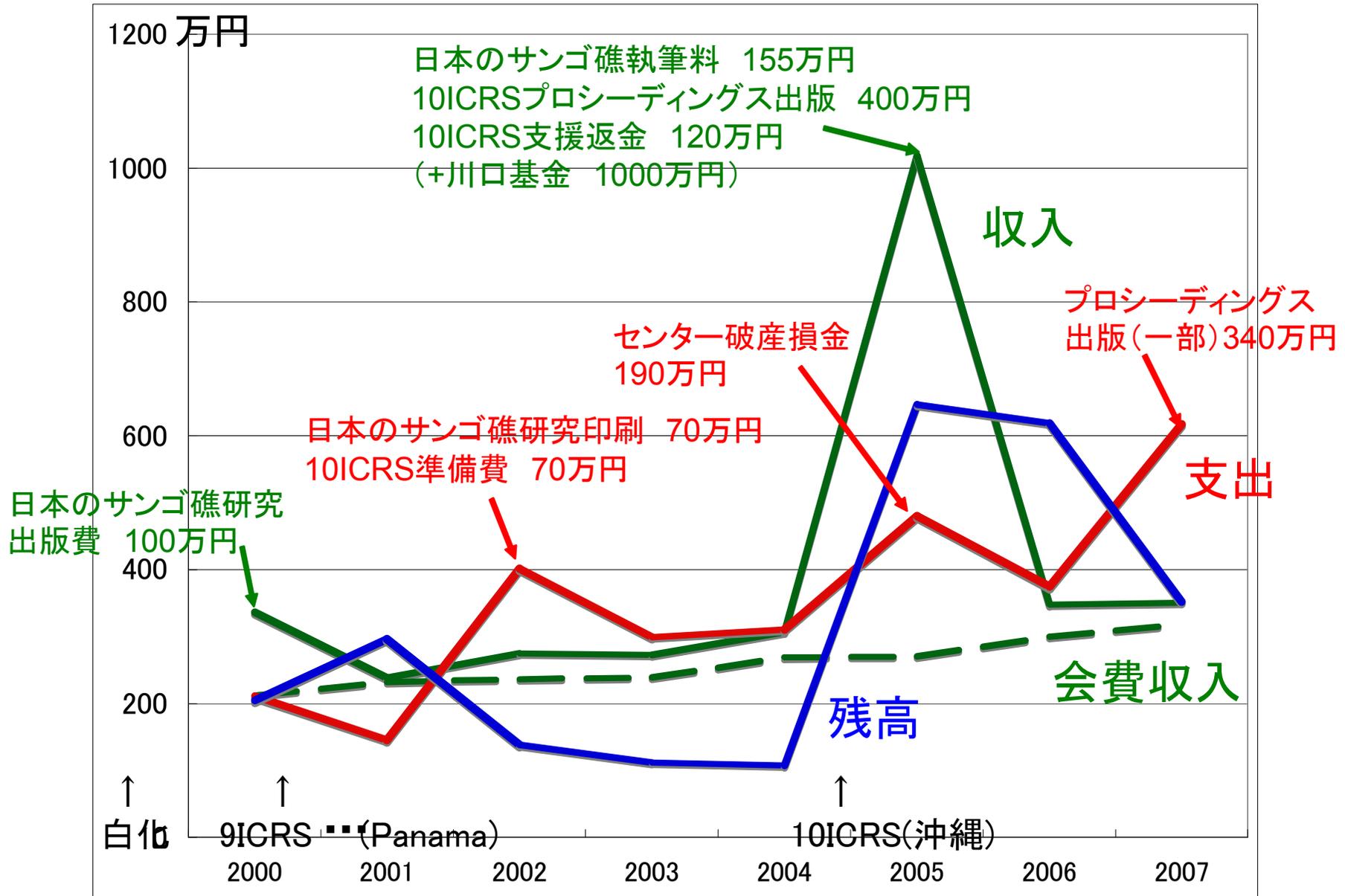
会員数推移



第10回国際サンゴ礁シンポジウム(2004年)



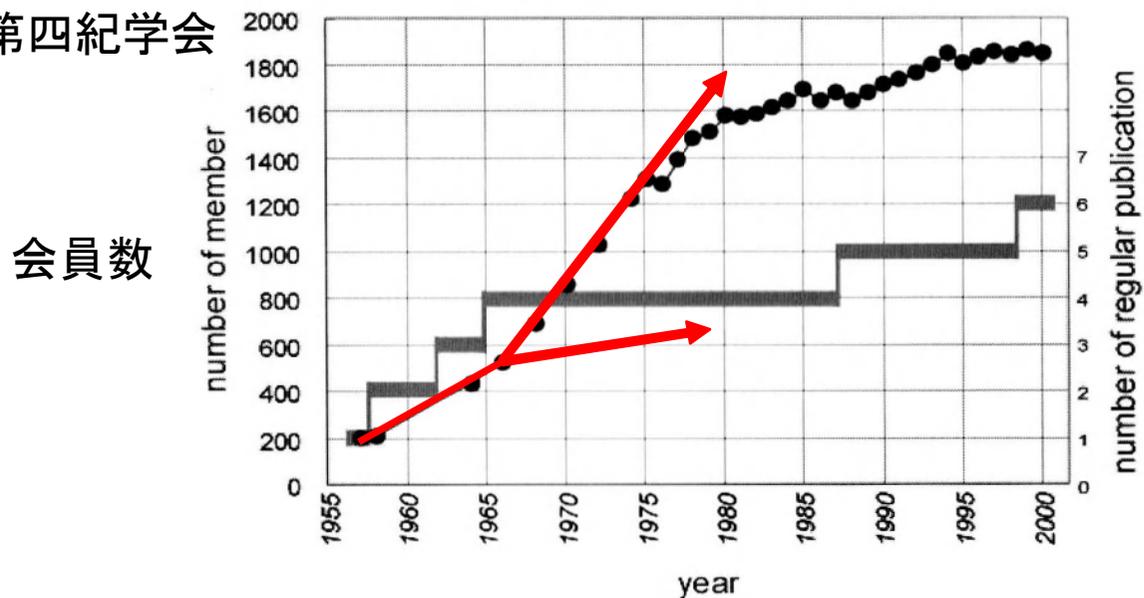
会計の推移



学会の規模

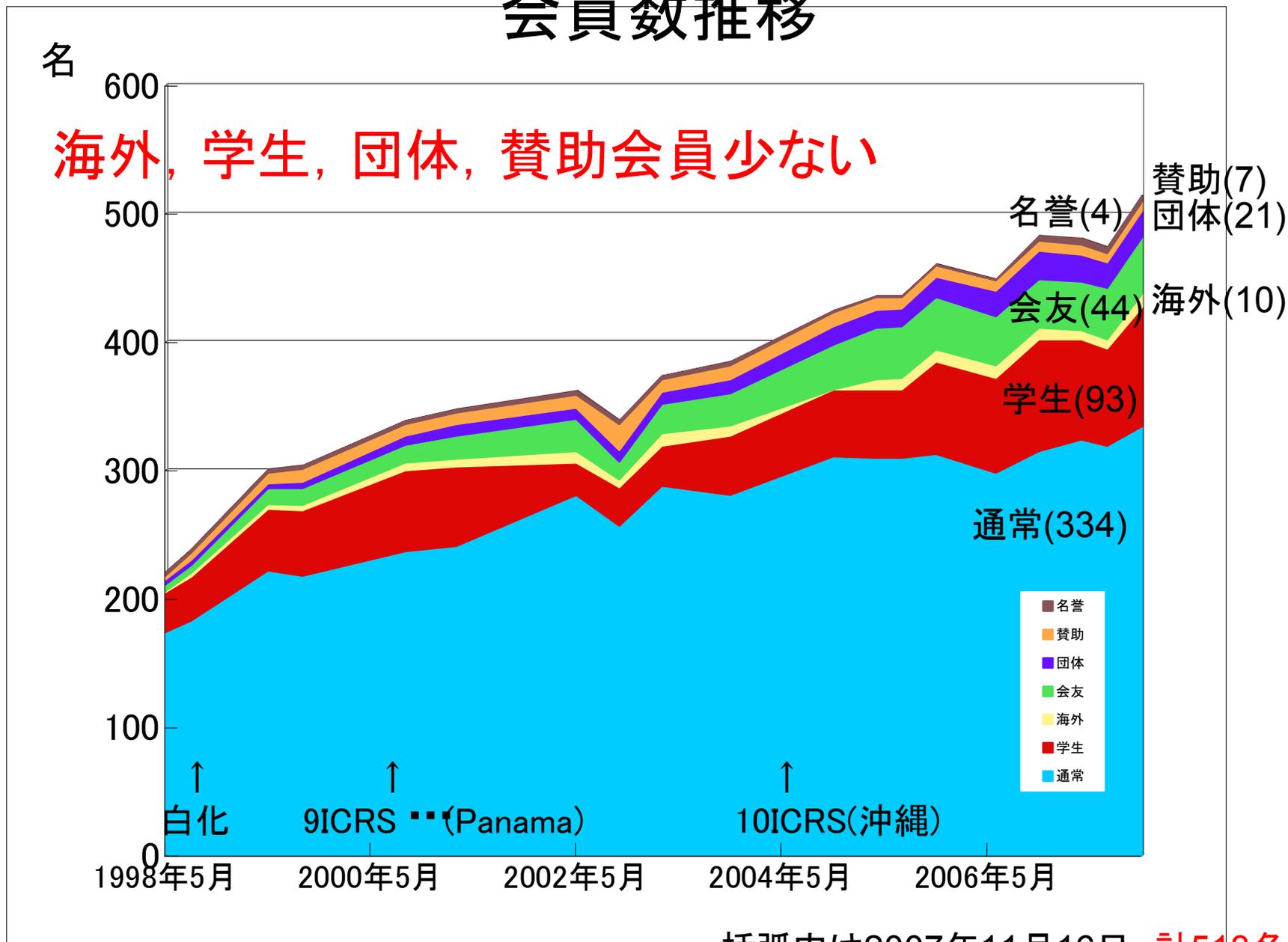
- 日本サンゴ礁学会(1997年設立) 513名
(他の学際学会との比較)
- 日本雪工学会(1986年設立) 650名
- 顔学会(1995年設立) 850名
- 日本第四紀学会(1957年設立) 1800名

日本第四紀学会



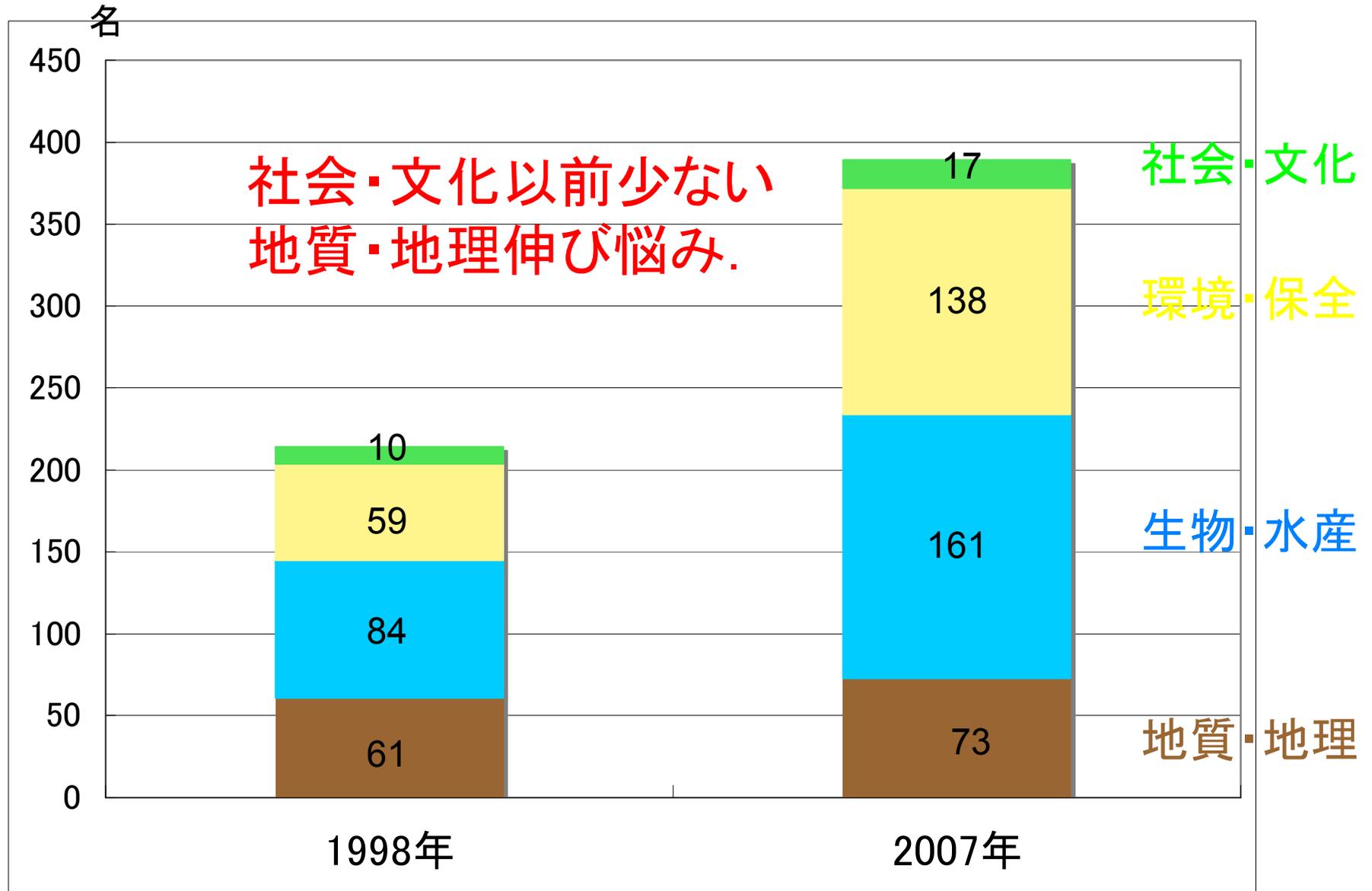
発足後10年の会員数
変化はほぼ同じ！

会員数推移

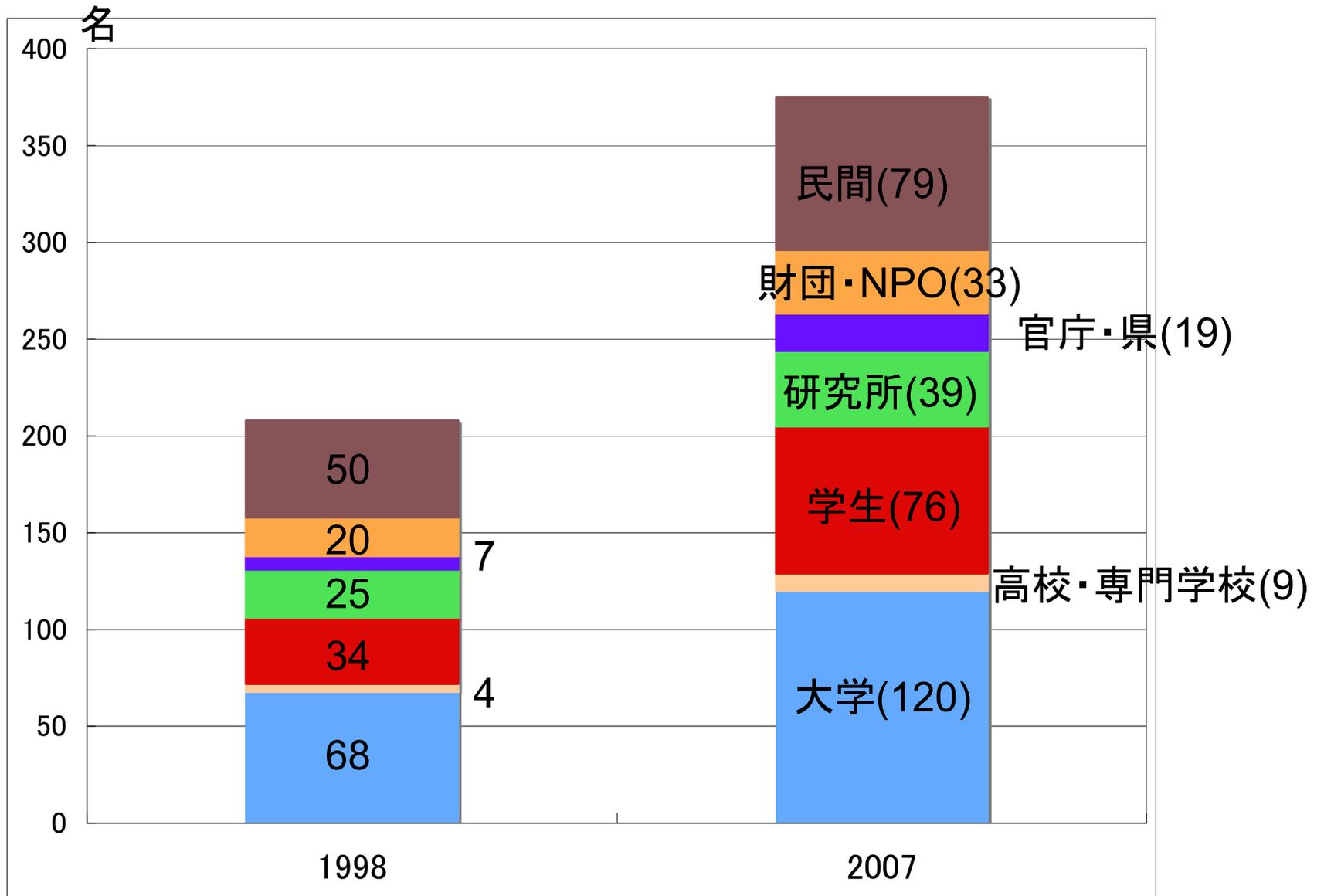


括弧内は2007年11月16日 計513名

会員の分野区分(選挙区分)推移

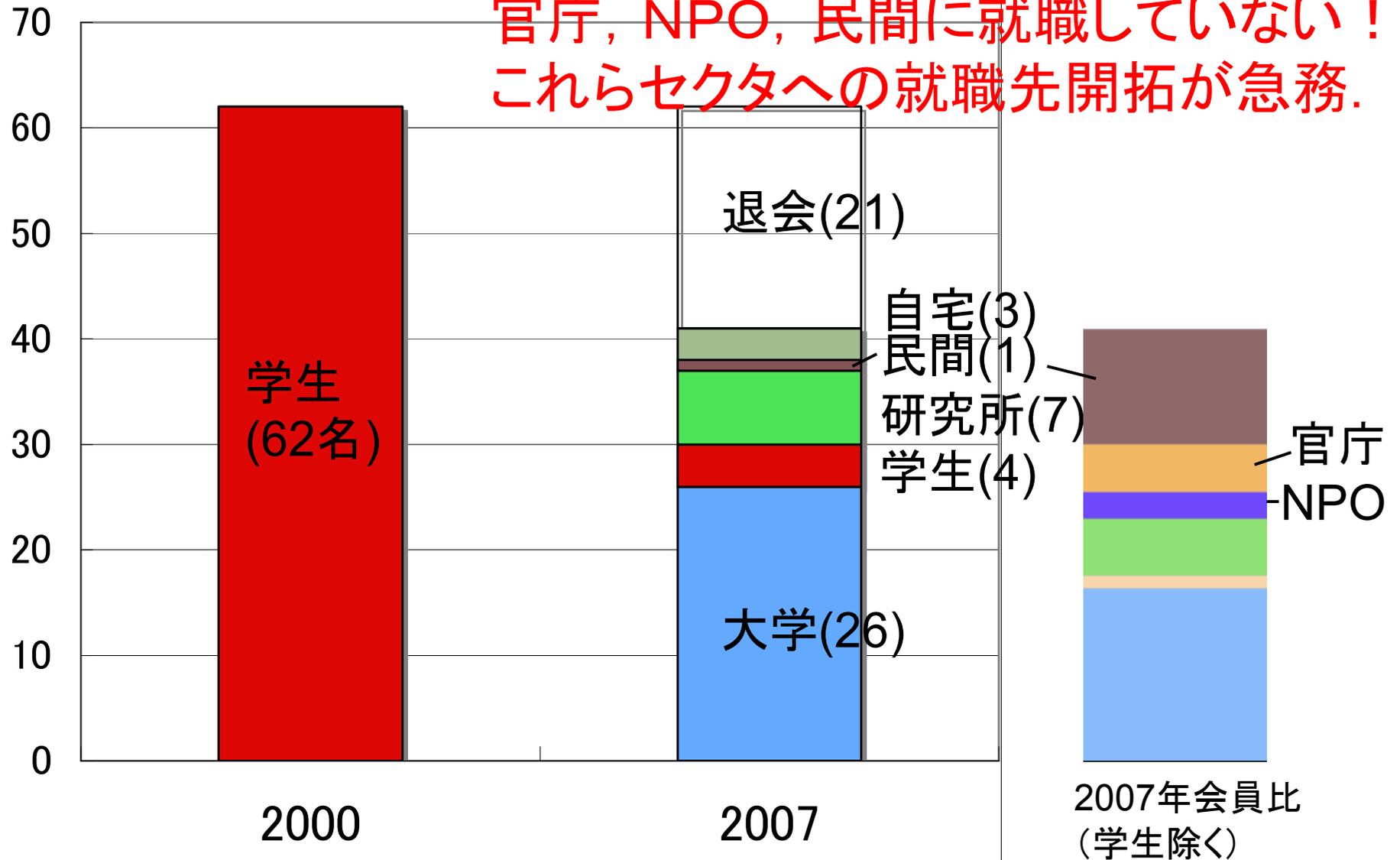


会員所属推移



学生会員その後(2000年→2007年)

官庁, NPO, 民間に就職していない!
これらセクタへの就職先開拓が急務.



日本サンゴ礁学会 これまでの10年 (事務局として自己評価)

- 学術研究の推進 70点
- 異分野交流
学際, 産官学 60点 社会文化分野少ない
産官学交流が不足
- 国際化 50点 国際シンポ成功100点
その後のフォロー不足.
- 後進の育成 50点 発表・勉強の場100点,
就職先開拓が不足.
- 社会への情報発信 50点 会友, 賛助会員少ない.

日本サンゴ礁学会 これからの10年 (事務局として)

- 学術研究の推進
 - 異分野交流
学際, 産官学
 - 国際化
 - 後進の育成
 - 社会への情報発信
- 社会文化, 地質地理 増
官庁, 団体, 賛助 増
- ISRSとの連携
- 官, 民間, NPOへ就職先開拓
- 賛助, 会友増

200名から500名, 1000名へ. 意識改革が必要(事務局長の...)
同好会意識からの脱却. 権威主義に陥らず若々しい学会に.